

悪い奴じゃない

青木 裕次

三 十六年の教員生活を終え、来し方を振り返ってみるに長いようでもあり短いようでもある。教育に対して高邁な考えがあったかと問われれば何とも言えないが、一つの信念だけは貫き通せたと思う。それは複雑なことではない。良いことは良い、悪いことは悪いと子ども達にしっかりと伝えること。いつの頃から、このことを自分の教育の軸にしたのか定かではない。色々な生徒達と触れ合って、何時しか私の胸の中に芽生えたのである。いたって単純なことだが、それを貫くことは容易ではなかった。生徒達に迎合したくなる。生徒達の顔色を伺おうとする自分がある。生徒から反発されたり抵抗され妥協しようという気持ちが芽生えそうになる。つまり、信念を貫くことは自分の中の自分との闘いであり戦いでもあった。若い時はまだよかった。年齢を重ねると下手な分別が頭を擡げ、生徒を理解するという美辞に惑わされることが多くなった。生徒を理解することと同時に、悪いことは悪いと伝えることが大切だと、常に自分に言い聞かせた。

そんな折、偶然に會津藩校日新館のことについて書いた物を読んだ。その中に、六歳から九歳までの藩士の子弟を集めて行う「仕」^じという組織の掟について書いてあった。掟は長幼の序の大切さを説き、虚言・卑怯な言い・いじめなどを固く戒めた七条からなり、最後に「ならぬことは ならぬものです」と締め括っていた。私は、これだと思った。生徒が可愛くとも、反抗されようとも「ならぬことはならぬ」と教えることが教師の務めだと自分に再度言い聞かせた。

その後、社会教育に身を置き十八年の歳月が流れた。そして教頭として再び学校教育の現場に戻った。新任校に赴く時、「良いことは良い、悪いことは悪い」と、生徒にしっかりと伝えることを怠ってはならぬと強く自分に言い聞かせた。十八年の時の流れに学校が大きく変

わったとは思わなかったが、以前と何処か違うと感じた。登校指導に立った先生が生徒達に声を掛けた。驚いた。先生は生徒達に「おはようございます」と声掛けしている。丁寧な言葉で良いのかもしれない。生徒達は元氣よく「おはよう」と返した。私は違和感を感じた。ガムを食べながら職員室に生徒が入って来た。先生方は気が付かなかったのか誰も注意しなかった。私は一喝した。それは、役職の違いであったのかも知れない。自分のシンプルな信念を貫くことの難しさに戸惑うことが多かったが、やり通した。

今

度は定時制高校へ校長として赴任することになった。そこでも、この一線だけは貫き通した。こんなことがあった。遅刻・欠席・無断早退、粗暴な振る舞いに授業妨害にもなりかねない勝手気ままな態度、そして教師に対する暴言。幾度となく注意し指導した男子生徒がいた。彼の私に対する反発は尋常ではなかった。しかし、私は悪いことは悪いと言いつつ指導し続けた。莫大なエネルギーを要した。それは三年に及んだ。養護教諭の先生が、ある日私にこんなことを話してくれた。件の男子生徒が「校長は悪い奴じゃない」と話していたというのだ。どのような話の流れでそんなことを言ったのか分からなかったが、私は胸が震えるほど嬉しかった。彼のその一言は、その後の私の生徒指導に大きな自信を持たせてくれた。

今年十月、七年間にわたって携帯小説として連載して来た「雪降る駅で」を単行本として刊行していただいた。舞台は高校、主人公は高校生達。良いことは良い悪いことは悪いと生徒達に伝える私の信念を支えてくれた物語でもあったと、今になって私は気が付いた。

(元青森県立北斗高校校長)